

木もれ日の中の子どもの遊び場

鯨くじらの森（大通西九丁目）

札幌の顔、大通公園。その九丁目が「鯨の森」と呼ばれているのをご存じですか。その歴史をたどってみました。

札幌が開拓される前、今の都心部は、ハルニレなどが生い茂る原生林の一部でした。また、ちょうど現在の大通西九丁目辺りには、わき水があつたそうです。明治に入り、開拓使によって今の大通が設定された時に、この森の部分は残されました。

この森は、遠くから見ると高く盛り上がった部分と、低くなっている部分があり、鯨が泳いでいるように見えたことから、人々に「鯨森」（鯨ヶ森・鯨の森）と呼ばれるようになったといわれています。

明治九年（一八七六年）、隣の大通西一〇丁目に屯田兵第一大隊本部と練兵場を設けてからは、鯨森は西側の大通と練兵場とを隔てる境目となりました。

練兵場のなくなった後の明治四十一年（一九〇八年）、鯨森を含む大通西九、一〇丁目は整備され、大

通の逍遙地しやうようち（大通公園の原型）に加えられました。鯨森の周りは、昭和の初めまで、子どもたちの遊び場となっていたようです。

戦争が終わり平和が戻った昭和二十一年、大通西六、一丁目には、市民の手でバレーボールコート、庭球場などが造られ、市民の広場となりました。

その後、鯨森の北側には、砂場やブランコが設け



昭和10年の鯨の森（左上の辺り）
—札幌市教育委員会文化資料室所蔵—



子どもたちが遊ぶ鯨の森

られました。また、三十七年には有島武郎之文学碑、三十九年には、鯨の尾をイメージしたジャンボ滑り台（ブレイスロープ）、四十一年には姉妹都市ポートルンドから贈られた六基を含む、十九基の鉄製の遊具が設置され、子どもたちの遊びの空間である現在の鯨の森の姿に近付きました。

平成元年秋からの大通公園再整備で、かつてあったわき水を再現した遊水路が新たにつくられるなど、いくつか手直しされ、楽しい遊び場になりました。

現在では、開拓当時のハルニレはほとんど残っていないようです。しかし、かつての森をほうふつさせるハルニレの巨木たちが今、ジャンボ滑り台や遊水路で遊ぶ子どもたちを見守っています。

（平成八年八月号・第三十三回）